



令和3年11月1日現在
世帯数 : 835世帯
人口 : 1520人
男 : 734人
女 : 786人

中町蔵の朝市 <コロナ禍の状況>

《土曜朝市のさきがけとして》

平成9年、蔵シツク館の竣工記念で開催されたのをきっかけに始まった『松本中町蔵の朝市』。町の組合駐車場へと場所を移し、雨の日も、風の日も、厳しい猛暑の朝でさえ、販売を中止したことがないのが自慢です。販売開始から約10分程で完売してしまうことから、日本一早く終わ



土曜日には野菜などが並び人々で賑わいます

る朝市として知られる様にもなりました。

この24年間で、松本市は観光都市としての知名度を上げ、朝市にも多くの観光客が足を運ぶようになりました。

軽快なリズムに乗せてまちの中に響くテーマソング。近隣に暮らす人も続々と集まり、あつという間の人だかり。色とりどりの野菜やくだものを覆い隠してしまいます。そんな賑やかな週末の朝は「変わる事などない」と誰もが疑いもありませんでした。

《人と音と彩の無いまち》

昨年の4月、蔵の朝市は、始まって以来初めて、一ヶ月の開催延期を余儀なくされました。新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受け、初の緊急事態宣言が発出されたことによる決定です。

初の緊急事態宣言下、松本のまちは、すれ違う人もまば

《まちの社交場として》

24年の歴史は、地域の人たちの暮らしにも根付いています。

週に一度、土曜日の朝の数十分という短い朝市ですが、長年通い続ける客も多く、高齢者や奥様方、近くの飲食店従業員らの社交場にもなっています。

岡田・並柳・中山・入山辺・里山辺などの地区から集まる農家の方々にとつても、馴染みの客や、他の地区の出店者と言葉を交わす、なくてはならない時間だと言います。

コロナ禍で希薄になりがちな、他人との関りやコミュニケーションが、「生きる」ための「活力」としてどれ程重要だったか、実感している方も多いのではないのでしょうか。

蔵の朝市は、地域の食卓ばかりでなく、心の健康を支える「サロンの」様な役割も担っていたのです。

《再生を目指して》

令和3年9月。長野県独自

の新型コロナウイルス特別警報が発出されていましたが、土曜の朝市は、着々と準備が進められていきます。

屋外の会場では、マスク姿の出店者が瑞々しい野菜やくだものを並べ、中町のスタッフは入場者の手に消毒液を吹き付けています。会場を訪れる人の数こそ以前には及びませんが、馴染みの顔ぶれには笑顔が見られます。

浅間温泉で生産されたハチミツや季節の生花を目当てに、マスク姿の目元をほころ

ばせた客がやって来ました。「ナイヤガラ」より甘みが強く、香りが良い「ポトランド」という品種のブドウは、作る人が少なく、あまり出回らないのだと、若手ながら朝市担当責任者を任せられている田村さんが、教えてくれました。

朝市ならではのやり取りと、ここしか出会えない人や品々。商店街が繋ぎ続けたきた地域の人と人により、蔵の朝市は少しずつ、その賑わいを取り戻しつつあります。

Presented by 視聴覚委員会

まちかどフォト



▲ 工事後 (供用開始前)

長い間、工事であった南環状線の中条跨線橋。供用が開始されました。



供用開始後▶

